

令和6年度  
「おくのほそ道」最上町俳句大会  
入選作品



選者近詠

俯せの甕に雪降る東山

潜らふとせず茅の輪を見てばかり

捨てるべきもの捨てて鮎落ちにけり

大類つとむ

シャンパンの泡真つ直ぐに去年今年

陽に押され人に押されて初詣

幾日も雪を降らせし障子かな

松田佳津江

大類つとむ 先生選

◇一般・高校生の部

赤倉ゆけむり館賞

結願の人と湯に入る遍路宿

特選

山の湯の小さき居酒屋星まつり

優秀

大いなる稚の尻や端午の湯

野遊びの吾子を草ごと抱きあげり

佳作

朝市の実梅商ふバナネ科

そば刈って夕日を畑に解き放す

秋草や風を敷き寝の放ち馬

入選

雪をんな湯宿に挿頭遺しけり

産土の空にとどきし今年竹

人に影犬にも影や大西日

杣人は風雨に聡し蕎麦の花

挨拶をかわす露天湯星涼し

千葉県木更津市

安田蝸牛

山形県最上町

北朔二

埼玉県春日部市

斉藤利彦

神奈川県川崎市

下村修

宮城県大崎市

門間としゑ

山形県東根市

菊地みさ子

宮城県大崎市

木村螢雪子

大分県大分市

小野道山

群馬県大泉町

林宣子

宮城県大崎市

京極久也

青森県八戸市

今順子

山形県尾花沢市

大類響子

大類つとむ 先生選

◇中学生の部（優秀句）

通り雨大にな虹の忘れ物

最上中学校

一年生 中寫 杏奈

乞巧奠大輪の花空に咲く

最上中学校

二年生 高橋 みく

来るはずの汽車待ち続け秋探し

最上中学校

三年生 五十嵐 文人

◇小学生6・5・4年生の部（優秀句）

きんもくせい香りただよう夜の街

平野小学校

六年生 高畑 星來

川底を遊びたゆたう昼の月

平野小学校

六年生 植村 怜禾

銀山におかうにげ水きらきらと

尾花沢小学校

五年生 大類 雫

◇小学生3・2・1年生の部（優秀句）

カマキリのまねしていねをかったぼく

向町小学校

二年生 秋葉 瑛都

いもに会大きいなべにうちの味

向町小学校

三年生 加藤 ひかり

わたりどりそらに大きなこうさてん

向町小学校

三年生 菅 絢心

松田佳津江 先生選

◇ 一般・高校生の部

赤倉ゆけむり館賞

春泥しゅんでいの靴くつの取とりまく足湯あしゆかな

岡山県玉野市

立石はるか

特選

手てのひらといふ手てのひらに栗持くりもたす

愛知県犬山市

福田匠翔

優秀

秋晴あきばれや車夫しゃふの上腕じょうわん二頭筋にとうきん

新潟県新潟市

酒井春棋

佳作

手てに持もつてより湯ゆの袖子ゆずのほころべる

愛知県犬山市

福田匠翔

湯治とうじしてシトかバリかを問とふ夜長よなが

千葉県松戸市

堀卓

舟唄ふなうたは薰風くんふうへ乗のり最上もがみ川がわ

岐阜県大和町

海神瑠珂

指ゆびにまだ稻いねの香残かのこる湯治とうじかな

山形県酒田市

朝岡剛

入選

主亡あるじなき犬小屋いぬこやしんと冬銀河ふゆぎんが

愛知県春日井市

伊藤千加

葉桜はざくらや友達ともだちできた下校げこうの子こ

岐阜県大垣市

安藤昇司

松田佳津江 先生選

◇中学生の部（優秀句）

進むたび歓迎されるや花吹雪

新庄中学校

三年生 隠明寺 寛菜

通り雨大きな虹の忘れ物

最上中学校

一年生 中嵐 杏奈

帰り道余韻のつづくまつりの音

最上中学校

一年生 渡邊 結人

◇小学生6・5・4年生の部（優秀句）

持久走一緒に走る赤トンボ

大堀小学校

四年生 阿部 璃虹

秋の夜おかしをもらい次の家

向町小学校

六年生 庄司 凜音

秋の道夕日が木から舞い落ちる

平野小学校

五年生 蔡 卓寧

◇小学生3・2・1年生の部（優秀句）

あかとんぼおそらでいつもうんどうかい

大堀小学校

一年生 齊藤 礼華

カマキリのまねしていねをかったぼく

向町小学校

二年生 秋葉 瑛都

ひがんばなあかいじゅうたんみただね

平野小学校

三年生 石井 ゆの

楽しく嬉しく

大類つとむ

「オーバートーリズム」とやらで、最上町をはじめ多くの市町村の観光地に見馴れぬ顔立ちの人たちがどっと押し寄せています。

「おくのほそ道」の旅に出た元禄期の芭蕉も今で言う「観光」だったのでしょうか。物見遊山とはちよつと、いや大分に違ったその旅は、故に今の私たちにさまざまな思いと考えることを求めています。この大会に寄せられた沢山の句を拝見しても、それぞれに遊び、考え心を動かして非日常の時間の大切さを改めて教えているような気がします。また子供たちの俳句からも、よくもの見る事がいかにひとりひとりの個性を引き出してくれるという事を物語っています。

「山の湯の小さき居酒屋星まつり」

どこかに泊まると決めて下駄を鳴らして出掛けたくくなります。ふと見つけた小さな居酒屋、期しくも今日は七夕。降るような星がこの小さな居酒屋を包んでいます。見知らぬ山間で迎える今年の星まつり。いつにも増して美味しい酒となりました。ドラマのワンシーンのようなシチュエーションです。

「大いなる稚の屁や端午の湯」

「稚の屁」がぶくぶくと浮いてくる光景をくつきりと見せています。赤子の持つ生命力はまさに「大いなる」ものと言えましょう。

五月五日の油がこれからの成長をしつかりと見守ってくれます。心からの喜びの俳句です。「端午」は「菖蒲」の方がいいのかな……。

「野遊びの吾子を草ごと抱き上げる」

まさに一瞬の充実感が表れています。草に戯れている幼な子をその中から抱き上げる喜びを無駄なく捉えました。「野遊び」「吾子」「抱く」と常識的に並べられた内容のようですが「草ごと」によってとても嬉しい句になっています。元の句は「抱きあげり」でしたが、「抱き上げる」に直させていただきました。

「結願の人と湯にあり遍路宿」

今日結願という人と湯舟に出合いました。この宿はこれまで何度も体を休めたお馴染みの湯舟でしょう。湯を共にしながらこれまでのさまざまな修法や道々の出来事を領きながら楽しく伺っています。「結願」と「湯」がこれまでに無い句柄となりました。お題が良く生かされています。元の句は「いる」でしたが、「あり」に直させていただきます。

もつともつと句に触れたのですが、字数が尽きそうです。佳句は楽しく作ったように感じます。優しい句も、難しい句も嬉しくつくる事がとても大切です。

子供たちの俳句も、もつともつと楽しければと思っています。



俳句というものは不思議で、作っているうちに自分をもう一人の自分が見つけているようなことがある。

「カマキリのまねしていねをかったぼく」

カマキリの真似をして稲を刈ったというユニークな発想は、作者がカマキリの生態をじっくり観察したからこそ生まれたものであろう。楽しい稲刈りの様子が一枚のスナップ写真のように切り取られています。自分の姿や心情や風景を写真を見るように思いだすことです。う。

「持久走一緒に走る赤トンボ」

持久走は体力だけではなく自分との孤独な戦いとも言われます。そんないっぱいっぱいのシンドイ中に「赤トンボ」が登場するだけで苦しかった状況が一変してほっこりとしたものになります。作者の肩や髪に止まった赤トンボが「がんばれ」と応援に来てくれたように作者は感じたのでしょうか。赤トンボと一緒に完走できた作者の誇らしげな姿が目には浮かびます。

自分のまわりの花や木や虫も仲間であることが小学生の特権であり俳句の特色なのかもしれません。

「通り雨大きな虹の忘れ物」

思わずカメラで撮って誰かに見せたくなるような堂々とした見事な虹だったのでしよう。虹はいつの季節にも見られますが、特に夕立の後によく現れるので、夏の季語になっています。虹は雨の忘れ物と言いつ切ったことがこの句の大きな魅力で、作者のポジティブな感性の豊かさを感じます。

「春泥の靴の取りまく足湯かな」

春泥の特徴が即物的に表現された句。厳しい冬を乗り越えた安堵感も伝わってきます。温泉街の足湯でしょうか、薄っすらと緑の芽が顔を覗かせ始めた土手や山々を眺めながら散策に疲れた足を足湯で癒している光景が浮かんできます。春泥の靴が春の到来の喜びを格別なものにしています。

「手のひらという手のひらに栗持たす」

なんと豪快で気前の良い句でしょう。

この句は、俳句に切り取られた情報が手のひらと栗しかありません。しかし、この句の情景がありありと伝わってきます。言い尽くさないことによって大きな詩の空白と余白が生まれ読者が自由に想像を広げることが出来るからだと思います。

豊作だった秋の味覚を会う人会う人に分け合っている作者の姿や、賑やかな会話や笑い声、手のひらに持たせた栗の数までもがリアルに伝わってきます。